

中島秀夫先生のお出直しを悼む

おやさと研究所主任
佐藤 浩司 Koji Sato

中島秀夫先生には、去る7月3日お出直しになられました。大正15年4月25日のご誕生ですから、享年85歳でした。

先生は、愛知県のお生まれです。天理第二中学校に入学、中学を4年で修了し神宮皇學館大学予科に進み、東北大学法文学部に入学されました。先生が、中学の同級生より先に大学へ進まれたので、ご友人達はこぞって東北大学にて学ぶようになったそうです。当初、法科に籍を置いて学んでおられたのですが「性に合わず」、文科への転籍を希望して学生部へ相談にいったところ、ちょうど学生部長を務めておられた石津照璽先生と出会い、先生の勧めで宗教学を学ぶことになりました。石津先生は、二代真柱中山正善先生の東大における2年先輩でしたので、長く師弟としての交わりが続くことになりました。私が3回生の時、石津先生の集中講義がありました。ご著書『宗教哲学の基礎的構造』と『宗教哲学の場面と根底』に基づく講義でした。両書を購入して事前に読んではいたのですが、難しかったということだけ覚えています。石津先生は、考えながらゆっくりお話をなさいました。考えられる時、握った拳を額に当てて、少し打つ仕草を致しました。中島先生がいつもお考えになるときにしていたポーズです。師弟というのは、これまで似るものかと感心したものです。このことは、平成17年12月1日に、ふるさと会館を会場に行った宗教学科特別講義「天理教教義学の探求—中島秀夫先生に聞く—」で、お尋ねしたことです。ちなみに、以下の記述の多くは、その時にお聞きしたことに基づいています。その時の記録は、『天理教学研究』43号（天理教道友社、2009年）に掲載されています。ご覧いただければと存じます。

先生は、昭和24年3月宗教学科をご卒業なさり、4月から、一時天理高等学校第一部の社会科の教員としてお勤めになりました。翌25年、前年の天理大学開設に伴い、天理文化研究所を改めて付置研究所として発足していた宗教文化研究所（現おやさと研究所）の所員となり、ご専門の宗教哲学の研究を続けられました。昭和35年文学部宗教学科へ講師として移り、以後、昭和36年助教授、同43年教授に昇格、昭和62年規定に従い停年退職となりますが、直ちに再採用となり、平成9年3月までの実に48年間専任として教学に携わりました。その間、宗教学科主任、文学部長、また学校法人天理大学理事などの要職を歴任、平成4年の大学改革に当たっては力を注がれ、人間学部が創設されると初代学部長をお務めになるなど、大学の経営や行政面でのお働きも顕著なものでありました。

学生の生活指導は、「親切」をモットーとされているだけに定評があり、一れつ会の大学担当扶育委員を長く務め、男子学生寮である柚之内ふるさと寮の舎監、そして主任を7年4ヵ月の間お務めになっています。私は学生時代の昭和41年から45年3月の卒業まで、先生が主任をお務め頂いている時、その柚之内ふるさと寮北寮で生活させていただきました。寮生大会や寮の行事には必ず参加し、学生の健康状態をはじめ生活面での問題はないかと常に心をかけておられました。寮に隣接して設けられていた「ふるさと講」の朝づとめでは、在宅の折には必ず芯をとられ、何を仰るわけではありませんが、ホッとした安心した気持ちになり、とても良い一日のスタートとなりました。熱心に語学を習得していた寮の先輩方が、学科教員の指導を不満に思い、辞職をせまるという運動を画策したときにも、時間をかけ懇切に説得して事なきを得たものです。私どもは、何分、全国に学生運動が吹き荒れた、いわゆる全共闘世代ですので、大学の各種のあり方に不満をぶつけ、大衆団交となりました。先生はこれに快く応じて下さり、ご本部大祭時やふるさと講

次祭参拝における出席カード配布の廃止や、ふるさと講直会のあり方についての要求など、改善策が話し合われ、直ちに実施に移されました。

おやさと研究所に限ってみれば、先生にとって親友の一人である山本久二夫先生が学長に就任し所長を兼務されると、昭和47年の研究所改組が専任を置かないというものであったため、研究所設立の趣旨に即した本来の活動を進めるにあたって不都合であるところから、あらためて発展のための改組を目指すことになりました。先生は、この会議に参画し、改組の成案づくりに携わりました。昭和62年には、副主任となって主任の丸川仁夫先生を補佐し、平成7年から9年の退職まで、主任としてお務め下さいました。退職後も、平成17年3月まで嘱託として、それ以後はお出直しになれる今日まで、顧問として、ご指導を頂きました。なお、先生には、平成13年11月13日、名誉教授とされています。

先生は、天理教学の泰斗として、その名は教内外を問わずとに著名であります。天理教学は、研究所に奉職の傍ら、新制となった天理教校本科にて修められました。芹澤茂先生も昭和25年、研究所にお勤めになりながら本科で学んでおられます。いわば同窓生としてその後ずっと気心の知れた同僚でいらっしやいました。お二人が師と仰ぐ諸井慶徳先生が、研究所の所長と天理教校の校長及び本科の主任を兼任しておられたので、本科で学ぶようにとの諸井先生の御指示によるものであったかと思えます。

研究所にお勤めの当初は、専門の宗教哲学の研鑽が続けられると同時に、天理教学に関する基礎的研究に従事されたようです。宗教哲学に関しては、当時の流行でもあったヤスパース、ハイデッガー、ケルケゴールといった実存哲学を主に研究されており、研究発表をなさっています。天理教学に関しては、「出直し」「かしの・かりもの」「教祖論」「救済論」「啓示論」「神論」「ひながた」などの基本的教理について研究を進め、主に英文の *Tenri Journal of Religion* に発表しています。大学の講義も、宗教哲学とともに、諸井先生に代わって、「天理教教義学」を担当されています。

天理大学に宗教学科を開設するに当たって、時の文部省との交渉において、担当の係官から「大学で教えられるような天理教学という学問が確立しているのか」との問いは、諸井先生を初め、当時衝に当たっておられた先生方にとって余程重かったようで、その言葉を何度も先生は口にされていました。中山正善先生は、天理教の二代目の真柱として、教祖の教えを出来る限り正確にしかも広く多くの人に伝えることに心血を注がれました。それ故大学を創設されたわけですが、そのお側にあった先生方は、天理教学の確立に身も心も尽くしておりました。中島先生も、それら先輩先生方の薫陶を受けながら、同じように身も心も捧げられたことは、想像に難くありません。先生は、諸井先生が提示された天理教学の理念と枠組みに沿って、その構築の一翼を担っておられます。『天理教学研究』など研究誌



名誉教授をお祝いして

に寄稿された論文や、編集者の要請によって執筆した論文を読めば分かります。

先生が古稀を迎えられる少し前、それまでに発表された論文などを纏めた『総説天理教学』（天理やまと文化会議、1992年）が出版されました。編集者の技量にもよるのですが、目次をみれば天理教学への目配りの良さが一目瞭然です。先生は、「深い穴を掘るには、できるだけ間口を広くしておくべき」という考え方を持っておられ「しかし、一つの問題を深く追求することを怠る結果を招いている」と反省し、「発表した文章は比較的短いものが多い」、その意味で「もう一步踏みこんであげばよかった」「もっと根気よく考えを深めておくべきであったと思うものも多い」（引用はいずれも前掲書「あとがき」と述懐されています。しかし、いずれの論文も、問題を精査し、とことん追求したのち、遺漏がないように行き届いた内容で、しかも分かり易く、端的に記述されていることに気づきます。同じく「あとがき」に、「まとめて頂いた結果から、身にしみて思ったことが一つある。それは、いわゆる実践教学に関する論文が少ないということである」と述べられ、「今後の課題」としています。実践教学の学科として、「教会学」や「伝道学」が挙げられますが、平成2年の研究報告会において「教会学試論」のタイトルで発表し、教会学の枠組みについて私案を示されました。東田ナカ姉のアメリカ布教について著述した『母ひとり海を渡る』（天理教道友社、1986年）は、個人の伝記であるとともに、異文化伝道について考究した伝道学の書であるといっても過言ではありません。また、マールブルグにおいて天理教展を開催した折、中心的な役割を担われましたが、まさに伝道学を実地でしめされたようなものです。実践といえば、諸井先生と共に天理教学の確立に心を砕かれ、おたすけの実践によって教会を設立された深谷忠政先生が、研究室のスタッフを引き連れて、国内では、部内教会のある所沢において、また海外では、ハワイやアメリカ本土においておたすけ活動をなさいました。中島先生も、率先参加し、貴重な経験を数多くできたと、目を輝かせてお話しくさしました。

天理教学研究の態度として、先生は常に「謙虚であること」と仰り、ご自身実行されています。啓示は、永遠の真理で絶対のものですが、研究は「啓示された真理の絶対性を志向しながらの相対的世界における努力」にすぎず、「あくまでも謙虚に、研究をとおして明らかになったことを喜びながら、親神様の思召を求め続けるということが大切」（前掲『天理教学研究』）と述べています。教学研究に取り組む姿勢は、中山正善先生に学ばれたところが多く、「教務審議会」のメンバーとして参加した折、意見がたとえ食い違っても、個々の意見は尊重していたことに感銘を受けたと言われています。中山正善先生のお話で、中島先生が何度も仰っていたことがあります。宗教文化研究所時代の機関誌として『宗教文化研究所報』が年4回発行されておりました。あるとき、編集長の藤田増平先生が、二代真柱中山正善先生に



宗教学科特別講座（ふるさと会館）

呼ばれました。中島先生はどのような経緯かは分かりませんが藤田先生のお供でした。中山先生は、大変な剣幕で怒られたとい

うのです。学術研究ではなく、どうも「教えてやろう」という啓蒙的な態度と内容が気にいらなかったようです。中島先生は、恐ろしくて大柄な藤田先生のうしろに隠れるようにしていたとのことです。

中島先生のご研究の中で、忘れてはならないのが、おさしづ研究です。「おさしづ」は、確かに啓示の書、原典の一つとして位置付けられていますが、その性格から、おさしづ研究は実践教学に分類してもよいのではないかと考えています。先生は、学友でもあり教友でもある山本久二夫先生と、仲良く教学研究をなさっておられます。共著の『天理教教典講座』は、この種の著作としては、珠玉の書として知られています。『おさしづ』（改改版）は、明治20年1月4日から明治40年6月9日までの、教祖および飯降伊蔵先生の口を通じて伝えられた神の啓示の口述筆記を編纂刊行したものです。その時、その場における具体的な事柄についての指示で、しかも口述筆記であることから、「おさしづ」を理解するためには、相当の準備が必要です。現行の『おさしづ』は、全7巻と大部ですので、全体を把握することも困難です。多くの信仰者は、神言として断片的に伝えられる「おさしづ」の1節は知ってしましても、その「おさしづ」の神意は何であるかを理解していないことがあります。中島先生は、山本先生と教会本部から発行されています『原典集』に掲載されている「おさしづ」を全文解釈し、刊行したのが『おさしづ研究』です。当初、青年会の機関誌であります『あらしきとうりよう』に連載され、これが逐次4冊の分冊として出版されました。連載の当初は、旧の8巻本ですので、改改版刊行の後、字句をあらためて、上下二冊で再刊されました。その後、版を重ねて、今も広く読まれています。解釈にあたって、お二人は「基本教理に照らすこと、背景史実を明らかにすること」の手順を踏み、さらに「口述」であることを考慮して、お互いに読み合いをしたと仰っていました。原典本文から、何故あのように明解な読み下しができるのか、とその能力に感嘆したのですが、先生は、「神様は、伝えようとされているのであるから、分からせて頂けるように、その親心が受け取れるようにならなければ」とお諭し下さったものです。お二人の先生には、おさしづ全文の解釈をして頂きたかったと、今更ながら残念な思いがいたします。私も、早く親心が分かるようになりたいものと、念願して止まない今日この頃です。

先生の若い時代の文章を読むと、とても長文で難解な表現が多く、理解するのが大変です。講義もそうでした。ところが、停年を過ぎた頃からの文章も、講義も、お話も、短文で、明解でした。全体を把握しているからなのでしょう、内容も遺漏がありません。そのような先生がお書きになったのが、『かなの教え』（天理教道友社、2006年）です。是非、皆様に読みたい本の一つです。

私は、大学と本科で先生の講筵に接し、寮において生活を通じて先生の信仰を目の当たりにし、学ばせて頂きました。大学へ勤めさせて頂いて、なお、研究会等を通じて警咳に接し、教えを受けることができました。大変な難く光栄なことと思っています。私は、本科に学びながら研究所のお手伝いに通っていました。先生の後を受けて、天理教教義学の講義を持たせて頂きました。柚之内ふるさと寮の主任も7年7ヵ月つとめさせて頂きました。今、研究所の主任を務めさせて頂いております。何か、先生の後を慕っているようですが、中身が全然違います。少しでも近づくことが出来たらと念じております。今、先生には、親神様の懐でゆっくりお休み頂き、早い生まれかわりをお願いして、先生をお偲びする文を閉じたいと思います。